

	<h1 style="text-align: center;">英国人のお茶への情熱</h1> <p style="text-align: center;">sce-net 神田 稔久</p>	<p>E-66</p> <p>発行日 2014.7.29</p>
---	--	---

私は、珈琲の口に残る味が苦手で、代わりに紅茶を好んで口にします。駐在していたマレーシアでも同じように紅茶を口にしていたのですが、紅茶を飲むたびに、紅茶と英国人のことを考えていました。

英国人は、植民地には、必ずと言ってよいほど競馬場とゴルフ場と茶畑 (Tea Plantation) を持ち込んでいます。マレーシアも例外では無く、首都クアラルンプールのど真ん中に競馬場を造り、競馬を楽しんでいたようです。ゴルフに関しては、今でもその歴史を継ぐ名門ゴルフ場が都心に残っています。さすがに茶畑は赤道直下のマレーシアでは高地に作らざるを得ず、標高 1,000 メートル近いキャメロンハイランドと言う高地に、立派な茶畑が展開されています。

お茶に関しては、ボストン茶会事件やアヘン戦争等の様々な歴史物語がありますが、その中から英国人が東南アジアに広げた茶畑の歴史を辿ってみたいと思います。

英国の悲願は、中国に頼らない新たなお茶の産地の開拓でした。それは、先ずインド (アッサム茶) での成功となって実を結びます。始めは、中国からの茶の木の輸入による栽培を試みますが、ことごとく失敗してしまいます。1823 年、アッサム地方に古くからあるお茶の木の発見により、それを乗り越えることができました。このアッサム茶の木は、原産地は中国雲南省辺りで、タイ族によってアッサム地方にもたらされたものと言われています。アッサム茶は、1838 年に英国に輸出され、その後大きく発展して行きます。

現地に根付いたアッサム茶の成功の影で、中国種のお茶の木の唯一の栽培成功例は、ダージリング茶のみと言われています。

この成功体験は、次にセイロン (スリランカ) での成功につながります。1841 年にはお茶の栽培が始まっていましたが、その後病気に全滅したコーヒー畑にお茶の木を導入することで、1873 年頃から本格化したのです。インドでの経験から、最初からアッサム茶を導入することで、短期間での栽培拡大に成功します。

この流れは、やがてマレーシアにも及びます。1929 年に、英国人の J.A.Russell によって始めて茶畑が開かれます。その後、セイロンから茶栽培の職人を呼びその技術を確立し

ていきました。

今では **BOH Tea** というブランドで売られていますが、セイロン系のお茶にしては苦味が少ない（残念ながら香りも少ない）日本人好みのお茶となっています。

半島マレーシアまで来た紅茶造りの流れは、最後はボルネオ島に達します。これは、英国人では無くマレーシア人の手によって、1978年に東南アジア最高峰のキナバル山の麓に展開する茶畑となって実現します。とうとう、英国人の紅茶へ情熱が、お茶の木を赤道直下まで辿りつかせたことになります。

このお茶は、**Sabah Tea** というブランドで売られていますが、見た目は日本の緑茶に近く緑色ですが、淹れると紅茶、味は緑茶と紅茶の間というものになっています。

一方、同じ東南アジアのインドネシアがお茶の一大輸出国（輸出量世界 5 位）であることはあまり知られていないと思います（Bulk で輸出されるため）が、このお茶の開発はオランダ人の手によるものでした。貿易戦争で英国に大きく後れを取る中で、英国のインドやセイロンでのお茶栽培の成功に発奮し、1878年頃にはアッサム茶の導入による茶畑の開発に成功しています。

この成功も一本道では無く、この成功のはるか前の 1684 年に日本からの親木の導入を試みて失敗した歴史があります。オランダ人も英国人に負けずに頑張ってきました。

一杯の紅茶に思いを馳せながら、ミルクティーはミルクが先か紅茶が先かなどを考えていると、香りと共に夢も広がります。



Sabah Tea の Plantation

蛇足ですが、お茶の木の 아프리카での栽培は、アジアからかなり遅れて、ケニアでは 1903 年頃、マラウィでは 1860 年頃から、ウガンダでは 20 世紀の初め、タンザニアでは 20 世紀初めにドイツ人によって、次いで英国人によって、始められています。そして、現在では、ケニアは世界 4 位のお茶の産出国となっています。